

南無阿弥陀仏 ～人と生まれたことの意味をたずねていこう～



尾畠春夫さんのいるあいだ、笑顔が絶えませんでした。



人と生まれて

二年後に厳修される、ご本山の「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年」慶讃法要のテーマが、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」であることを知って、「人と生まれる」という言葉に射止められ、そして問われました。

この暑い夏、私がどれだけ蚊や蠅など邪魔な虫けらをたたき殺してスツとしてきたか。また動植物を食べては、うまいまずい、高い安いに心を動かし、愛玩用に観賞用にいのちを弄んで喜ぶのも、私人間。ましてや愛する者を奪われたとなれば、私は鬼と化するに違いない。これを「人」と言えるのか？ 「人と生まれる」とは、どういうものになることなのか？と。

「三帰依文」には「人身受けがたし」とあります。お釈迦様は、生まれて間もなく七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と叫んだと伝えられています。「我、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という六道をこえて仏にならん！」これがお釈迦様の産声だったのです。

私達も産声を上げました。新しい命を待っていた父母や親族は、汚れなきいのちの叫びを聞いて慶び、「おまえ自身のいのちの花を咲かしてくれよ」と願ったことでしょう。しかし人の命を稀に受けながらも、苦しみ多い一生をどのように歩んでいけばよいのか迷い、光を求めなかった人はいないでしょう。

そのような私達の一生を「人の世に 生まれて 生きて 生かされて 南無阿弥陀仏になりました」(*)と墓碑に刻まれていると聞いて、訪ねたことがありました。明るい秋の光の中、寺の境内の片隅にひっそりと碑は佇んでおりました。泥まみれの一生を「ありがとう」と微笑んでいるようでした。

(純子)

* 田川組・定善寺前任職・村上慶範先生の言葉

御名を聞く会 (七月二十八日)

南無阿弥陀仏と法蔵魂

— 鍵主良敬先生からいただいた課題 —

マイケル・コンウェイ先生

(大谷大学准教授)

依り処の転換

鍵主先生から「真宗の要は依り処の転換である」と教えていただきました。

私たちは何を依り処として生活しているかというところ、この頭ですね。ところが、鍵主先生は「脳はバカで腸が賢い」とおっしゃる。頭で考える時に勘違いがどれだけ起こるか。世界は複雑ですから、自分の頭で全部わかるわけではない。必ず外れが出て、がっかりさせられ、イライラさせられる。

コイツ、ダメ

それで、鍵主先生は、私の頭を指しながら、「コイツ、ダメ」って言うんですね。

「コイツ」はただ「バカ」だけでなく、自己中心性極まりなきものです。先生がおっしゃるように「隣の人の片腕が切り落とされた痛さより私の小指の先に突き刺さった小

さなとげのほうが痛い」し、「他人の不幸は蜜の味」という、そういう自己中心性の深い闇を抱えている。自分さえよければよい、今さえよければよい、と。

浄信を呼び起こされる

私たちは、こういう話を頭で聞くと、自己中心性をやめ



て、もう少し優しい人間になろうと思うわけです。しかし、「私、私、私」と思っているこの頭では、「私」の問題性は絶対に解決できないですね。昨年の6月9日、先生の88歳のお誕生日に、学生の方々が先生の自宅に集まってお話をし、お話を聞かせていただきました。そのご法話が「南無阿弥陀

仏は法蔵魂ぞ」という結論にさしかかった時、私の腹の底からなんとも言えない清浄な気持ち呼び起こされたんです。皆さんも、聞法していく中で、腹の底から完全に洗い流されて、すがすがしい気持ちになったことがあると思います。

『無量寿経』の異訳の『如来会』では、私たちが「諸仏如来が無量寿仏の威神功徳を讃歎したまう」のを聞くと、私たちの中に浄信が呼び起こされると述べておられる。その浄信こそが法蔵魂であり、私たちが生きていく依り処とすべきもののなのです。

穢を捨て浄を欣ぶ者

『教行信証』の総序の文の中に、私たちに依り処の転換を呼びかけている言葉があります。「穢を捨て浄を欣び、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」と。

私たちの「日ごろのこころ」は、いつでも汚れたものを嫌がり、浄らかなものが欲しいですね。それが「穢を捨て浄

を欣ぶ」ということです。でも「コイツ」を中心にして生きている限り「穢を捨て浄を欣ぶ」つても、どうしたらいいかわからない。汚れは限りなく出てきて、処理し切れない。そこで「行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの」と言われます。そういう私たちに、親鸞聖人は、「特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」とおっしゃられるわけです。

最勝の直道に帰す

「特に如来の発遣を仰ぎ」とは、人間の深いところの願いを指標にして生きなさいという先生方からの呼びかけです。「必ず最勝の直道に帰して」というのは、人生を振り返ってみると、いい選択もしたけど、悪い選択もした、遠い回り道をしてきたように思うけども、実際は、私たちの人生は一刻一刻と続く「直道」なんです。

僕自身の経験でいうと、若い時バカなことをしたんです。ある薬物を使って身体を完全に壊して精神病院に入院せざるを得ないような選択をした

ことがあるんです。それから五年くらい、後遺症でもものすごい苦しみと、ものすごい鬱状態の中で暮らしました。でも、あのバカげた、私の人生で最も悪い選択が今ここに私を立たせている、あれがここに直結しているんですね。

この信を崇めよ

そして「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」と。人間の本当に依り処とすべきところは、「コイツ」ではなく、わたしたちの法蔵魂である。私たちの心の奥底の意識、根底を支えている私たちの生命力、いのちの泉、それを依り処としなさいと。

「崇」という字には「長（おさ）とする」という意味があります。つまり「コイツ」に運転させるのではなく、この信（浄信、法蔵魂）を依り処にし、それを人生の「長」としなさい、つまり自分の人生の運転手にしなさいと、こう親鸞聖人はおっしゃっています。（文責 藤谷知道）



先生の「ご法話」をYouTubeにUPしてあります。ぜひお聞き下さい。

「かはづの会」研修

婦人会総会にむけての話し合いで、無謀にも、スーパーボランティアの尾畠春夫さんをお願いしようとなりました。

さっそく、坊守さんと佐藤麗子さんが、尾畠さんは由布岳に

尾畠春夫さん

くるかもしれないと朝早くから出かけましたが、空振り。それなら、その足で日出町に行ったら、不思議なご縁が重なって尾畠さんに会うことができた。でも、「お話などできない」と断られてしまいました。

次の日、三役が集まって、どうお願いに行こうかと相談していたら、突然、尾畠さんが単車でやって来て、とても驚きました。

本堂にあげていただき時間も忘れて話をするうちに、質疑応答形式ならと、やっと受けて頂くことができました。

7月17日の「かはづの会」総会でのお話の一部を掲載させていただきます。

Q. なぜ、ボランティアを？

私は昭和14年生まれで82歳です。65才で商売（魚屋）をやめ、残りの人生を、受けた恩を体で返そうと思いボランティアを始めました。

Q. 生活はどうしてですか？

今の私は年金生活です。一年に6回、11万円ずつ頂いて、それで全部をまかなってます。

Q. なぜ、魚屋に？

父は下駄職人だったが、靴が流行りだし廃業。お袋は41歳で亡くなり、小学5年から農家に奉公に。中学校もほとんど行ってません。卒業後、姉から「声の大きなおまへは魚屋にむいている」と言われ、天の母の声と思い、魚屋の丁稚になりました。

「石の上にも3年」と言う

が、自分は3倍努力しないとイケないと思い、10年間3カ所の魚屋の丁稚をした。その後、店の開業や嫁さんを迎える資金を貯めようと、東京に出て3年間とび職をした。昼夜を問わず働いて、そのお金

で、別府に「魚春」という名の魚屋を開業しました。

Q. 奥さんとは？

向かいに貝を売る店があつて、その娘が中学校から帰るとすぐ着替えて店の手伝いをするのを見て、こんな人ならと思つて結婚した。

でも、7年前に「顔を見るのが嫌になった」と言われ、これまで一言も不満を言わず



手伝つてくれたので、10年間の生活資金と年金基金の証書を渡し、別居しています。

Q. 色んな人が訪ねてくる？

来る人拒まず、去る人追わず、です。裏社会の人、警察の人、若い女性から78才のおねえさんまで。一晚語り明かして、「尾畠さん、私、生き

ていくことにした」とハガキをくれたこともあります。

Q. なぜ赤い服？

この作業着は南三陸の及川ふみえねえさんから頂いたもので10年以上着ている。黒い服だと不審がられるが、赤い服なら声を掛けてくれやすい。被災した人達や落ち込んだ人たちが心が明るくなります。

Q. 世の中を憎まず、皆のためにと考えるのは、なぜ？

皆さんからよく聞かれるけど、どうしてか分かりませんね。感受性が強かったかもしれない。

Q. どんなお母さんでした？

私の記憶では世界一素敵な人だった。お袋からは一度も怒られたことはない。

Q. 子育ては？

男の子は厳しく育てた。小学校の時、真冬の寒い日、返事の仕方が悪かったから、店の土間に正座させて水をぶっかけたことがある。男の子は一家を背負って行かなければ

ならないから厳しく育てた。その息子が大きくなって、ひよこつと来て、「親父のせがれに生まれて幸福だった」と言ってくれた。最高に嬉しかった。

娘はかわいいかわいいで育てた。大分に住んでいて、二三日おきに料理を届けてくれます。

Q. 尾畠さんの生活信条は？

人に優しく、己に厳しく。人を大きく、己を小さく。明日は必ず来る。夜は必ず明ける。好きな言葉は「絆」です。

大きな声で笑いに溢れ、楽しく心に残る時間でした。最後に、暁鳥敏先生の「母の歌」をみんなで合唱しました。尾畠さん長時間有り難うございました。（文責 若林範子）



このバーコードをスマートフォンでかざせば、この日の様子が見られます。

ご門徒さんこんにちわ！ 第二十一回

今回は四日市の瀬々と義さんをお訪ねしました。

瀬々さんは、3年前におこった脳溢血の後遺症のため、左半身が麻痺してしまい、自宅で車いすの生活を送っています。それにもかかわらず、今回のインタビューを快く受けてくれました。

瀬々さんは、昭和24年3月生まれの72歳、ご住職とは小・中・高校の同級生です。兼業農家だった瀬々家の長男として四日市の西本町で生まれました。兄弟は弟と妹の三人兄弟です。母親は健在で99歳になるそうです。

「わるごぼ」が原点？

子供の頃の瀬々さんは、元気が良くて片時もじっとしてることがありませんでした。幼稚園の時は一日中、園の中を走り回り、家に帰っても、おじいさんに「こらー、カズヨシ！」といつも叱られていたような元気な子供でした。さて、高校を卒業すると電電公社に就職しました。選んだ理由を尋ねると、高校の入

学当初から自分でいろんな就職情報を集めて研究し、就職は将来性がありそうな電電公社と決めていたそうです。以来52歳で退職するまでの34年間、宇佐支店に勤めました。

奥さんの支えがあつてこそ！

瀬々さんといえば、すぐに

支え合つて いつも前向きです！

瀬々 和義（四日市）

浮かぶイメージは、労働運動と平和運動です。その関わりについて尋ねると、21歳の時に職場の役員に推され、それ以来、退職するまで、電電公社だけでなく、宇佐市全体の労働運動等のリーダーとして活躍しました。

その間、奥さんはずっと家庭や家族を守り続けてきました。そんな奥さんの存在があったから、瀬々さんは安心して活動できたんですね。

奥さんとの結婚について尋ねると、結婚したのは瀬々さ

ん23歳、奥さんの富子さん22歳の時でした。富子さんの父親が四日市で畳屋をしており、取引先に四日市の電電公社がありましたので、公社の知り合いに適当な人がいないか紹介を頼むと瀬々さんが紹介されたそうです。12月に見合いをしてトントン拍子に話がすすみ、3月には結婚式をあげました。お互いに一目で気に入ったからでしょうね。

子供は一男一女に恵まれ、

息子さんは実家のすぐ近くに住んでおり、娘さんは杵築にいて両親の様子をしょっちゅう見に来てくれるそうです。

感謝しています！

富子さんも、6年前から人工透析を続けており、決して

体調が良いわけではありませんが、車いすの瀬々さんをかかえたいとお世話しておられます。富子さんは「二人とも病人やし、私が明るくしとかんと二人とも潰れてしまう。それに私が悪い時は、私の介

護をしてくれたから今度は私がしてあげる番。ようやく二人でゆっくり過ごす時間が出来た」とにこやかに話してくれました。そんな奥さんに瀬々さんは「感謝しています」の一言がずっと出たのが印象的でした。



わるごぼの面影がありますか？

時、脳梗塞で倒れ、後遺症が残ったので仕事はその時に辞めたそうです。はじめは杖をついてなんとか歩ける程度でしたが、リハビリに励み、不自由なく生活できるまでに回復しました。

勝福寺総代として

6年前、住職から頼まれて、横町・本町地区担当の総代になり、勝福寺の親鸞聖人七五〇回御遠忌では実行委員として法要の準備を進めていまし

た。ところが、御遠忌直前に脳溢血で倒れたのです。瀬々さんは年末に行われた宇佐市の歳末チャリティショーの立ち上げから25年間、実行委員として関わってきました。その会議の最中に倒れたのでした。今回は重い後遺症が残りましたが、現在も週3回のリハビリをしています。

小さい時から、お婆さんの背中に負われて勝福寺に通った瀬々さんに、「お寺はどんなところですか」と聞いたたら、「お寺は心の安らぎの場であり、人との出会いの場である」と即答して下さいました。

夢は叶いますよ！

瀬々さんの夢は、豊後高田市真玉のお寺（光徳寺）で開かれる瀬々一族の先祖祭りに出席することだそうです。真玉の瀬々一族のルーツは近江で、蓮如上人の生母の墓と言いい伝えられてきたお墓を守ってきました。

瀬々さんは「車いすでは参加することが難しい」と、おっしゃっていますが、いつも前向きな瀬々さんには蓮如上人や勝福寺のご縁もあり、必ず夢が叶う日がきますよ！

（文責 渡辺 重昭）

令和三（二〇二一）年度 勝福寺総代会報告

2021.7.1
2022.6.30

7月6日に総代会が開催され、二〇二〇年度の事業報告及び法要会計決算等と二〇二一年度の事業計画案及び法要会計予算案等が承認されました。

二〇二一年度事業計画

法要日程

① 秋季彼岸会 並 永代経

【日程】 9月25日（土）

【講師】 住職・坊守

② 報恩講

【日程】 22年1月21（金）
～23（日）

【講師】 太田浩史先生

* 今年度から当番制に戻り、お斎を出す方向で検討していく。

【当番地区】 常德十院内

③ 春季彼岸会 並 降誕会

【日程】 22年4月1（金）
2日（土）

【講師】 未定

研修事業

① 「御名を聞く会」

毎月28日 午後一時半～

【講師】 外部より招聘（五回）
住職・坊守（四回）

【会費】 外部より講師を招聘する時は冥加金（千円）

② 「はじめの一步」

毎月第二土曜日午後一時半

【参加費】 無料

21年度のテーマは「お内仏のある生活」

教化活動

① 「かはづの会」（仏教婦人会）

研修会、清掃奉仕、親睦会などを実施

② 「たんぽぽ子供会」

春、夏、冬休みに実施

* 「手と手みらい hug キッチン」と共催していく。

③ 「平和の鐘」を撞く集い

8月15日

④ 「忘れな鐘」を撞く集い

3月11日

⑤ 「ひびき」年四回発行

1月・4月・7月・10月

本山納金並びに御法札について

今年度から総代会で話し合ったうえで、御法札や本山納金については、御依頼する金額について基準となる額を決めることにしました。ご門徒の皆さまには、できるだけ基準額での納入

をお願いいたしますが、事情がある方については、金額の多少はおまかせすることになりました。よろしく願います。なお、具体的な金額については、秋季彼岸会法要のご案内のうちに、詳しく説明させていただきます。



平和の鐘を撞く集い

世の中安穩なれ、
あんのん

仏法ひろまれ！

親鸞聖人

八月や六日九日十五日

という句があると聞きました。六日は広島、九日は長崎の原爆忌でした。炎暑の中、高齢の被爆者の方が核兵器禁止条約への署名をと訴えられました。世界で唯一の被爆国である日本が第一番に署名できないわけは何なのか？ すつきりしない原爆忌が今年も過ぎました。やがて十五日、終戦記念日が

戦記念日が

二〇二〇年度法要会計 決算報告

総収入 1, 797, 854 円
総支出 1, 142, 651 円
* 差引き残額 655, 203 円を営繕特別会計に繰り入れました。

営繕特別会計積立残高

1, 256, 208 円

やってきます。世界中に戦争がなくなることを願う一日としたいものです。ぜひ平和を願う鐘を響かせましょう！

11時30分 勝福寺本堂にて読経・焼香

12時 別院鐘楼にて鐘撞き

19時より 映画鑑賞

黒澤明監督 志村喬主演
「生きる」（昭和27年公開）

小崎登明氏（被爆修道士）

戦争反対を叫ぶだけでなく、人間とは何かを考えて！
そうしないと戦争がまた起きる。

（案内チラシより）

ちょっと、お邪魔します！

お寺へはまだ足が向かない、そんなご門徒さんをお訪ねするシリーズの第2回目。今回は看護師をされている宇佐市大塚の吉松美枝子さんを訪ねました。

◆コロナで大変でしょうね。マスクして、ガウンを着るので、疲れますね。

◆仕事はどうですか？

人間関係が難しく悩まされたときがありました。院長の田畑正久先生がよく話を聞いて下さり「嫌な人を排除するのではなく、何を自分に教えてくれているのか受け止めることが大事だよ」と教えてくれました。

◆どうして大塚へ？

義父がガンになって、お姑さんから「私が家事をするから、帰ってきてください」って頼まれて帰ってきました。お姑さんとはどうでした？
お姑さんとよくけんかしました。最初は夫を通していたんですが、かえってややかしくなるので、直接話をすることにしました。あの頃は、腹が立って腹が立って仕方なかったけど、今考えると、あれで良かったと思いますね。お互い、言いたいだけ言えるので気が晴

れるんで、娘みたいに思われてましたよ。

◆ご主人は？

私は小さい時から体が弱かったので看護師になりました。主人がいつも私の体を気遣って「もう休んでいいよ」とかよく手伝ってくれます。



◆大家族は大変ですか？

子育てする時、親戚や友人が大勢いて良かったですね。息子の嫁も、そんな所で子育てをしたいと言って、帰ってきてくれました。

◆お寺のことは、どう？

お月忌参りには、孫も婆ちゃんと一緒にお経を聴いて、「お坊さんになる！」って言うってんですよ。

◆美枝子さんは、どうなの？
里の父がよくお参りしてま

したので、その後ろ姿を見てるからでしょうね。花が枯れていたら、娘が変えてくれたりします。私は、朝は「よろしくお願いします」、夜は「ありがとうございます、した」と掌を合わせていま

生活の中の仏教用語

有り難う

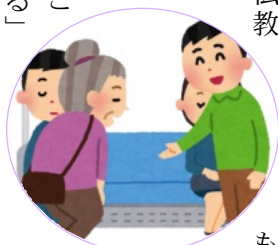
電車の中で席を譲ると「ありがとうございます」と言葉が交わされ、大変すがすがしい気持ちになります。

実はこの「ありがとう」という言葉は本来は仏教語に由来します。

「有り難し」と書きますが、「どう考え

ても有ることは困難だ、有るはずもないことが現に今有っている」という意味です。

「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く」。ここに「有り難し」の根源があるのです。私たちは日頃、空気でも水でも友だちでも家族でも、有ることが当然だと思っていま



す。やはり何か落ち着くというか、安まるんですよね。◆お寺にもお参りしてね。大塚の「仏教婦人会」には従姉妹と行ってます。お寺にも一緒に行く友達がいます。いいんですけれど。

て知る親の恩」という言葉も昔から言われています。有って当然と軽く受け止めていますが、亡くなってみなければ気づかないほどに、私たちはその存在のかけがえのなさに鈍感なようです。

私たちの境遇は浮き沈みの連続です。悲しいことも嬉しいこともあり、悲喜こもごもの人生です。その中であつて、出遇いがたき仏法に出遇い、聞き難い仏法を聞く身にさせていただきました。

私はその子育てのなかで、わが身を「有り難し」といって丁寧に生きてまいります。このうなぎこそが、人と生まれたことの意味をたずねていく人生の出発点になるのではないのでしょうか。（『暮らしのなかの仏教語』（大江憲成著）から一部を抜粋させていただきました。）

「フードバンク」にご協力ください！

勝福寺報 98号で紹介した「手と手みらい hug キッチン」

からのお願いです。

今のご時世、生活にお困りの方がたくさんあります。

フードバンクは、皆さんの家庭で余っている食品を集めて社会福祉協議会を通じてお困りの家庭に届ける社会貢献活動です。

対象となる食品等は米、インスタント・レトルト食品、パスタなどの乾物、調味料、その他日用品で未開封で賞味期限が1ヶ月以上あるもの。趣旨に賛同頂ける方は勝福寺にお届けください。

不明の点は西大まで。

(080-8393-2150)

編集後記

今回の寺報で取り上げた方々には共通の特徴がありました。それは眼力（めじから）の強さです。皆さんそれぞれ置かれている環境、条件は違いますが、目的を持たれて活動し、そしてその生き様に感動を覚えました。（渡辺 重昭）

